

## 【いざ、というときに試される 地域の多文化共生度】HICE15周年記念講演会

日時：平成19年3月3日 13:00～16:50 会場：フォルテ 野本作成 Ver

3月3日、浜松国際交流協会が主催した国際理解講演会に参加し参加レポートをまとめましたので報告いたします。基調講演では、新潟中越地震における災害時の外国人支援に携わった、長岡市国際交流センター羽賀友信センター長から体験談を聞かせていただき、被災時における外国人の心理を知ることができました。

なお、会場に災害ボランティアコーディネーター修了者の鵜飼さん、加藤さん（浜松市）前田さん（湖西市）の姿もありました。

### ～災害時の外国人支援から見たもの～

#### 基調講演

浜松市の外国人登録32,000人（比率3.9%、2007年1月現在）。

長岡市は2,000人（比率1.1%、2003年）で中国人（留学生や研修生が多い）、ブラジル人、フィリピン人の順番。

6年前にセンター立ち上げ業務を始める。

#### 発災直後の状況

地震で全てのハード・ソフトが機能不全になり、日常のコミュニティが機能しない。また、職員が災害対策本部に配備、勤務困難により14名から実質3名体制で支援を実施。したがって、市民ボランティアに大きな負担をかける状況になる。

羽賀さんに外国人からダイレクトに電話連絡が集中。発災2日目、多文化共生センターと連絡が取れ、被災地外からの支援体制が確立していく。

#### 何が起きたのか理解できない

地震がない、知識を持っていないブラジル人は、衝撃が大きかったので地球が壊れたような恐怖心に脅えた。

中国人は、不安になると仲間と群がり声を大きくして会話を始める。

日本人でもキーを挿し、車のエンジンをかけるのに30分かかり日常行動がとれない。（頭の中が真白、パニック症候群）

人手不足で情報を翻訳ができないなど組

織・業務機能低下に陥る。

自助努力の方法が分からない

避難所がどこにあるのか分からない。

災害救助サービスを受けられないと思っている。（日本人に遠慮、日本語が話せない）

不安を解消、学校校舎が壊れると思込み、公園・駐車場に仲間同士で集う。また車で避難生活、エコノミー症候群による血栓障害が残るケースもあった。（車で避難行動を起す）したがって、避難所の指定数が増える要因の一つになった。

#### 経験から その1

混乱時には、文字でない声＝ラジオが力を持っている。

中国人の窃盗団などの風評被害による問い合わせに対応する時間・労力が大きな負担であり対策が重要である。

補償問題で留学生を通訳ボランティアに活用できなかった。



経験から その2

外国人文化がどう噴出すのか。また良くも悪くも災害時には増幅される。

文化通訳が必要。

中国人：不安になると自分だけを信じ、一人で生きようと勝手に話しまくる。  
また、大使館、航空会社、学校が負担して留学生を休校扱いで一時帰国させた。

ブラジル人：不安解消の場(サンバ踊り)。

イスラム系：お祈りの場を確保。

日本人：助け合う防災文化がある。

外国人がFMラジオを持っていないので800台神戸より送ってもらい配布。

まとめ

地域コミュニティFMは内側に向けた大切な情報源である。(マスコミは外側)

日常から外国人が聞くような番組が必要。  
災害時多言語情報作成ツール。

- ・ピクトグラフ。(絵にする)
- ・雨でも破けない投票用紙素材。

キーワード

自助が大きくなる仕組みが必要。

事前協議を行い備える。

忘れていない、見守っていること発信し伝える。(外国人の不安な気持ちを高めない支援策が必要になる)

## パネルディスカッション

三摩真己さん(NHK静岡放送局放送部長)

NHKは、災害時に指定公共機関として気象予警報、災害報道、広報を行う。

アンケートにより災害情報は、NHKテレビから多くの被災者が入手している。

事前に録音した英語の副音声放送に切り

替わるシステムになっているが、新情報は体制が整わないと無理。また地域の情報を取り扱うのは限界である。

多言語についてはラジオ第2で毎日10分間、平時に放送している。

愛知国際放送(RADIO i)のような地域の多言語コミュニティFMと協定を結べば、NHKの情報提供が可能。また浜松市、外国人を雇用している企業が投資する価値は高い。

吉村マルセイロ州二

(浜松市外国人市民会議委員)

ブラジルは地震が無いので分からないし興味がない。私の場合は体験から怖いことから慣れてきた。また、地震の情報を求めるようになり、備えをすることに変化。

地震では自分の体を守るのが精一杯、次に家族・建物の確認、情報確保。

その後、言葉・情報収集・避難所、共同生活文化や習慣(衣食住)の違いからの問題が想定される。

今何ができるか

- ・積極的に自主防災訓練に参加したが外国人の参加がない。また若者が少なく高齢者が多いのに驚いた。
- ・消火・炊き出しなどの訓練だけであり、地震の話、防災を啓発するビデオや写真がなかった。

市民会議でも提言を行ったが、訓練に参加する時間的余裕がないこと、言葉の障害が大きな問題。

またキーワードは、日常から話し合うこと、地域への参加が大切である。

羽賀友信センター長より

笛を持っていると言語でなく合図で周りに知らせることができる。

お互いの文化を知り、共有することで対話につながる。

## ワークショップ

トルコで被災した経験者の発言  
車で移動、上層階へ避難するなど日本では想定外（逆）の行動現象。（文化、建物構造の違い）

防災訓練に参加した外国人の発言

打合せの段階で拒否発言（一緒訓練したくない）当日にハイヒールや服装まで注意される。近所の方からアドバイスをいただきたい参加しやすい雰囲気づくりが必要。

災害に対して不安が大きい。防災の専門言葉（用語）が分かりやすく、ビデオなどを活用して日常会話程度の外国人でも理解できるようにしてほしい。

グループ

「自助を高めるためには何が必要か」を外国人の立場で考え、日本人として何ができるかを話し合い、KJ法で コミュニケーション 知識（行動の考え方、体験） 情報、備えに整理した。



## まとめ

文化の異なりや地域性についても理解する。浜松市ではスペイン語、ポルトガル語がメインになる。

心のケア、自立支援がポイント。

被災直後は共有体験から高い気分（みんな一緒、仲間）になるが、長期的（被災から2年目）になるとストレス・疲労、被災内容が明確、仕事を失う、家族・家庭内不和などの要因が起り、不安・不平等感が生まれ気持ちが落ち込む。

友だちとして外国人に接する。

日常のイベントを活用

国際運動会やバーベキューイベントを開催して外国人を集め、避難シートの説明、ゴミ分別などの体験を行い啓発に努める。

ただし、文化が違うことを理解して根気よく（粘り強く）継続することが大切。

高齢者と外国人の居住地がラップ（重なり）していることが多い。

また、正しい接し方や情報を与え支援することで、地域パートナーとして支え合える存在に変化することも考えられる。

なお、ボランティアを見た中国人が現実的に活動参加するケースもあった。

外国人の90%は日本人と交流したいと考えているが、日本人の場合は10%。

支援する側である日本人の課題である。

補足 パネルディスカッションでは、内村正幸パネリスト（浜松救急医学研究会長）、鈴木光昭パネリスト（浜松市社協）からの活動報告、提言などもありました。

# 災害時の外国人支援熱く

県内版



デコボン  
鈴木 文子(浜松市東伊場)

大規模地震発生時や避難生活などの際の外国人への支援について考えるフォーラム「いざ、というときに試される地域の多文化共生度—災害時の外国人支援から見たもの」(浜松国際交流協会主催、中日新聞東海本社後援)が3日、浜松市旭町のフォルテで開かれた。日本人のボランティアや外国人約60人が参加し、講演やワークショップを通じて被災後の環境改善に向けて理解を深めた。

(中崎裕)

## 浜松でフォーラム

基調講演では、新潟県長岡市国際交流センターの羽賀友信センター長(右)が、新潟中越地震(二〇〇四年)での被災経験を披露。羽賀さんは、避難所で外国人と日本人の間で文化の違いによるトラブルが起きた経験から「災害時には日ごろの関係がよい場合も悪い場合も、それが増幅される」と指摘し、「普段から他文化理解を進めることが大切」と訴えた。

の吉村マルセロ州二さんだ」と話し、「地域住民(右)が意見交換。吉村さんは「外国人は地震の経験が紹介された後、浜松で東海地震が起きた。松市外国人市民会議委員ら大変なことになるはず。その後もワークショップ



「日ごろからの人間関係が大切」と話す羽賀さん—浜松市のフォルテで

## ボランティアら環境改善へ 多文化理解普及から



ワークショップで問題や解決策を話し合う参加者

ブで、参加者全員がグループに分かれて課題や解決策を討論。「日常会話も分かっていても難しい言葉は分からない。簡単な言葉で説明してほしい」といった要望が出され、羽賀さんは「文化が違うから、分かるまで根気よく伝えることが大切」と訴えた。

浜松など3会場

の内容や組織の概要のほ一手の確保が急務となっしながら育ていくもの(団体(NPO))代表で、

伊豆  
角で、  
畑園

昨日、芝居

財務省  
た通関統  
年1年開  
は157  
%増)  
629  
増)で、  
単価は前  
943

昨

# 災害時の外国人支援へ

## 浜松国際交流協会 情報伝達の難しさを指摘

浜松国際交流協会は三 開社・静岡放送後援)を 日、災害時の外国人支援 浜松市旭町のフォルテで 左考える講演会(静岡新 開いた。平成十六年の新



潤泉中越地 震で外国人 支援にあた った長岡市 国際交流セ ンターの羽 賀友信セン ター長が講 談を語る羽 賀さん(浜 松市のフォ ルテ

委員の吉村マルセロ州二 さんが地域の防災対策 の現状を討議するパネル ディスカッションを行っ たほか、外国人を支援す る上で、災害が起きる前 に必要なことを話し合う ワークショップが行われ た。

### 絵画や編み物など 住民の力作ずらり

#### 湖西表鷺津地区

湖西市表鷺津文化の集 い(表鷺津自治会、表鷺 津明湖会主催)が三日、 同市の表鷺津コミュニティ 防災センターで始まっ た。四日まで、 幼児〜八十代の表鷺津 地区の住民百人が百十 点の絵画、書道、編み物、



俳句などを出品してい ぶ。 筆運びの緩急に特徴 がある書道作品(飯田美 代子さん)、水彩絵の具 で風情のある庭や水辺の 風景を表現した絵手紙 (竹内喜実子さん)、力

浜

# 障害者支援の NPOが発足 湖西で記念式典

障害者支援を目的と した特定非営利活動法 人湖西生活支援シェイ クハンス(湖西市新所、 石田勝義理事長)の設 立記念式典が三日、湖 西市の浜名湖れんが館 で開かれた。三上元市長、 二橋益良市議会議員、障 害者、障害者の保護者ら 約六十人が設立を祝っ た。

石田理事長は「障害 者は地域の人と一緒に



生活することが大切。一市長は「市も可能な限り できるだけふれあい、理 応援助したい」とあいさつ

NPO法 人の設立を 祝う参加者 湖西市の 浜名湖れん が館

浜松市入野町の介 人保健施設「入野ケ ンター」で三日、「一 祭り会」が開かれた。 市を中心に活動する 州花笠会」と一歩の のメンバーが訪れ、 の利用者約二百人に かな民謡や踊りを振 った。 お年寄りに晴れや 気分になってもらお 企画し、毎年行って 職員らはおひなさま 装で登場しておめで 雰囲気を出した。

# べんがら横丁が1周年

## 記念イベント盛況

昨年三月にオープンした浜松市鍛冶町 の食のテーマパーク「べんがら横丁」 が三日、ワンコイン(五百円)ラーメン などの一周年記念イベントを開き、大勢 の客が詰めかけた。

横丁には新たに「博多 ラーメンぐるり」が加わ り、焼き肉や串かつなど も含めて十三店舗。五百 円ラーメンを三、四日に

ツアーが当たるトラベ キャンペーンも四月一 まで、各店舗で受け付 ている。 四日はラーメン教室 開き、申し込みのあつ 十六組六十四人の親